

私が育った街には、小さな本屋がありました。週刊のマンガ誌や、毎月発売される学年誌を心待ちに通う場所であり、コミックを立ち読みしながら友だちと待ち合わせする場所でもありました。大人になって訪れたとき、思っていた以上に小さな空間であったことに驚きましたが、すでに存在しないその空間が本の世界への入口になりました。

高校生になると、市の中心街にあった本屋が寄り道の定番になりました。本の世界は、少し広がりました。ただ文庫本の背表紙を目で追う。作家の名前を確かめる。気になったタイトルがあれば棚から抜き出し、あらすじが書かれた裏表紙やカバー袖の文章を眺める。解説を斜め読みする。つぎはこれを買おうか、などと考えながら、或る日の放課後は過ぎていきました。

大学生になって上京すると、本の世界は格段に広がりました。新刊書を扱う本屋でもそれぞれ個性的な棚づくりをするところが数多あるうえに、古本屋(街)が加わって、日が一日、足を棒にして歩きまわる日もありました。食費を抑え、バイト代が本代に消えていっても後悔はありませんでした。

そんな本屋をめぐる記憶はあっても、学校の図書室や図書館の思い出はありません。足も向かいませんでした。記憶に残るのは小学生のときによく利用した、公民館にあった小さな小さな図書室だけです。

あとづけで、いま思うことですが、図書館や図書室にならぶ本は品行方正で、選ばれた、お行儀のよいもの—利用者のために様々な工夫を凝らし、努力されている司書の方々には申し訳ないのですが、いつからか、そんな感じが私のなかにはありました。元来がへそまがりですから、大人や公的なものに認められた〈正典〉的なものへの反抗心もあったでしょう。選ばれたものから選ぶのではなく、それが〈あたり〉であれ〈はずれ〉であれ、自分の目でイチから選びたい。良書とは自分にとっての〈良書〉であればいい、それを誰かに決められたくはない、押しつけられたくはない。「夏休みの課題図書」的な〈つまらなさ〉と図書館、図書室は二重写しでイメージされていたのだと思います。

はじめて八戸ブックセンターを訪れたときに思ったのは、こういう本屋があつた頃にあったなら、ということ。よく「本は未知の世界に読者を導いてくれるもの」と言われます。その世界は光り輝いているのかもしれないし、漆黒の深い闇に沈んでいるのかもしれない。勇気や希望に奮い立たせてくれる世界かもしれないし、目を背けたくなるような残酷で悲惨な世界かもしれない。いずれにしても選ぶのは読者自身なのですが、ブックセンターはその未知の世界への選択の可能性を広げてくれる、

或る本屋がもつ特有の〈いかがわしさ〉にあふれる空間、魅力的な書棚を提供しています。

1冊1冊、それぞれの本に多様な〈読み〉がある。さらに様々な文脈に置きなおすことでその位置づけは変わり、これまでとは異なる読解がもたらされ、さらに新たな〈読み〉に読者を誘^{いざな}う。プロデュースの仕方次第で、おなじ本でも、いろいろな表情を見せてくれるのです。たったひとつの〈読み〉しか許されないような読書は、つまらない。多様な〈読み〉を可能にする〈いかがわしさ〉が大切です。それが読書経験を愉しく、豊かなものにしていくのだと思うのです。

私の高校の同期も、読書会ルームを使わせていただいて定期的に「本と珈琲」という会を催しているとのこと。ブックセンターには、これからも訪れる人を、読者を刺激し、多様な〈読み〉を促す〈いかがわしい〉空間であり続けてほしい。そう願っています。

坂本政謙 masanori sakamoto

岩波書店

本のまち読書会「クロストーク 編集者 坂本政謙
さんを囲んで」(2018)

1964年八戸市出身。岩波書店代表取締役社長。石油会社勤務を経て、1990年岩波書店入社。『君は誤解している』より佐藤正午のエッセイ集、短編集を編み、担当作『月の満ち欠け』(2017)で岩波書店としてはじめて直木賞受賞。

